人模様

岡山空港の有効活用などを目指す岡山県航空協会事務局員

大森　章夫さん（30）

（岡山市奥田本町）

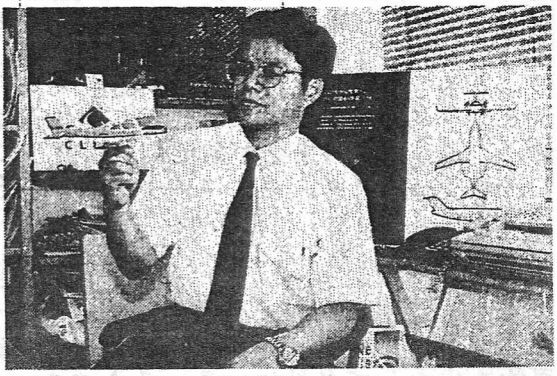
災害救援の基地に

最年少理事として奔走

幼いころから抱き続けた空へのあこがれ。「パイロットになって大空を飛びたかった」夢は、空港を生かした地域おこしへと変わった。岡山県航空協会（会長・古賀隆治岡山大教授）の最年少理事、また常駐事務局員として奔走している。

岡山空港の拠点性アップを目指す同協会は、緊急救援医療活動を行っているボランティア団体・アジア医師連絡協議会（AMDA、本部・岡山市楢津）とともに昨年から、同空港を災害救援の輸送基地とするための研究を進めている。「AMDAスタッフとの出会いにより、自分の仕事でも国際貢献の一端を担えることが分かり」、岡山を民間国際貢献の拠点とする運動に加わった。

五月末のロシア・サハリン地震に伴う、AMDAの救援医療チーム第一陣の派遣では、医師や全国からの救援物資を満載したチャーター機が六月二日、岡山空港から出発した。同協会はその際、チャーター機の手配や同空港での救援物資の備蓄手続きなどで協力を目指し、空港を会場としたスカイパレードなどのイベント企画やシンポ



▲空港を生かした地域おこしについて語る大森さん

ジウム開催を進め、行政への政策提言を行っている。

「いろいろな出会いが自分の宝物」と、これまでの人生を振り返る。同県上房郡北房町で高校まで過ごし、空への思いを抱きながら「食べていくため」広告会社に就職。「仕事にやりがいはあったが、将来、自分自身をどう高めていくかで悩んでいた」と言う。

平成四年。度々足を運び飛行機を眺めていた岡南飛行場で、転機が訪れた。同協会の中塚総一郎常務理事と知り合い、地域づくりに果たす空港の役割などを熱っぽく語り合ううち、協会入りを決意した。

「気象が安定した岡山県は、空港にとって最高の環境。子供たちに飛行機や空港の魅力を伝え、大人になっても空に夢を持ち続けることのできる地域を目指したい」と目を輝かせた。

空港を生かした地域おこしについて語る大森さん